

能代市文化財調査報告書第6集

国史跡檜山安東氏城館跡

檜山城跡Ⅰ

— 平成28年度第1次発掘調査報告書 —



2017.3
能代市教育委員会

ひ や ま じょう あ と
檜 山 城 跡 I

— 平成28年度第1次発掘調査報告書 —

2017.3
能代市教育委員会

序

本書は、平成28年度に実施した檜山城跡の第1次調査の成果をまとめたものです。

能代市では、これまで檜山地区を歴史の里と位置づけ、各種の施策を行ってまいりました。その歴史の里の中心ともいえるのが檜山城跡であります。室町時代から安東氏の居城として能代山本地域の中心となり、檜山町や能代港町の形成に関わってきました。

檜山城跡は、本地域の歴史的風土や自然環境を一度に体感できる場所であり、遺構の保存状態がよいため少し歩いただけで山城の中に入ることが実感できます。

昭和55年に大館跡、茶臼館跡とともに、檜山安東氏城館跡として国史跡に指定されてから37年になります。これまでは史跡を構成する大館跡で発掘調査が行われております。

このたび、平成10年から6カ年の縄張り調査、平成18年の能代市と二ツ井町との合併を経て、今年度整備計画を策定いたしました。今後は計画に基づき、整備を実施していく予定です。それに伴い、檜山城跡では初めてとなる発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、安東氏時代の遺物が見つかったほか、城を構成する曲輪や切岸の造成の様子が確認できました。また、城の中の道の様相の一端も垣間見られました。

本報告書はその調査結果をまとめたものであり、文化財保護や、中世城館研究のため広く活用していただければ幸いに存じます。

本事業の実施にあたり、ご指導、ご助言を賜りました文化庁記念物課ならびに史跡檜山安東氏城館跡調査整備委員会をはじめ、関係機関の皆様に感謝申し上げます。

平成29年3月

能代市教育委員会

教育長 須藤 幸紀

例 言

- 1 本報告書は、平成28年度に能代市教育委員会が調査を実施した檜山城跡の発掘調査報告書である。
当事業は国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて実施した。
- 2 本報告書の執筆は能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課公民館文化係主査播摩芳紀が担当した。
- 3 調査は文化庁及び秋田県教育委員会の指導を得て、能代市教育委員会が実施した。
- 4 調査及び本報告書の刊行にあたって次の方々からご指導・ご教示を賜った。(五十音順、敬称略)
秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室 五十嵐一治 五十嵐祐介 伊藤直子 宇田川浩一
近江俊秀 小野正敏 木戸雅寿 工藤清泰 栗山知士 小山美紀 斉藤利男 高橋和成
高橋学 中井将胤 中野晴久 檜山地域まちづくり協議会 藤澤良祐 文化庁 八重樫忠郎
- 5 本調査に関する全ての資料は能代市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 遺構実測図等に付した方位は座標北である。
- 2 本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
- 3 土層注記は基本層序にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。
- 4 遺構・遺物には以下の略記号を使用した。
SD 堀切・溝状遺構 SK 土坑 SKP 柱穴様ピット
RP 土器・陶磁器 RM 鉄関連遺物 S 礫 R 根

目 次

序

例言・凡例・目次

第1章 調査の概要・・・・・・・・・・	1	第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・	4
第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・	1	第3章 調査の記録・・・・・・・・・・	8
第2節 調査要項・・・・・・・・・・	1	第1節 検出遺構と出土遺物・・・・	8
第3節 調査の経過・・・・・・・・・・	1	第2節 現状変更判断試掘調査・・・・	17
第4節 調査の方法・・・・・・・・・・	2	第4章 まとめ・・・・・・・・・・	22
第2章 檜山城跡の概要・・・・・・・・	2	図版	
第1節 檜山城跡の立地・・・・・・・・	2	抄録	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

能代市教育委員会では、昭和55年に史跡に指定された後、除草などの保存管理を行ってきた。平成10年からの縄張り調査を経て、平成18年には能代市と二ツ井町が合併し、平成28年度に史跡檜山安東氏城館跡環境整備計画が策定された。平成29年度から整備を行う計画となっており、それに先立って発掘調査が行われることとなった。

発掘調査は、整備のための情報を得ることを目的として、補助事業を受けて実施した。調査主体は能代市教育委員会である。

第2節 調査要項

遺 跡 名 檜山城跡：史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡 大館跡 茶臼館跡）

所 在 地 秋田県能代市檜山字古城地内ほか

調 査 期 間 平成28年6月6日～9月20日

調 査 面 積 約134㎡

調 査 担 当 播 摩 芳 紀（能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課公民館文化係主査）

事 務 局 能代市教育委員会生涯学習・スポーツ振興課

課 長 松 橋 優 悦

課長補佐（兼公民館文化係長） 山 崎 和 夫

公民館文化係

主 査 松 橋 陽 子

主 査 相 澤 真 弓

業 務 員 三 熊 真奈子

臨時職員 細 田 那 未

指 導 機 関 文化庁文化財部記念物課、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、史跡檜山安東氏城館跡環境整備計画策定委員会、史跡檜山安東氏城館跡調査整備委員会

調査作業員 大山幸男、加藤まさ子、児玉駿介、平川裕幸

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成28年6月6日から断続的に9月20日の期間で実施した。6月6・7日に現状変更対応のためのTP1の試掘調査を行った。第1次調査区の調査は6月13日から7月14日までの20日間からはじまり、6月13日から17日までは現状変更対応のTP2、3の試掘も行った。6月13日には、

調査用道具置き場と休憩場を兼ねたテントを設置した。堆積状況を確認しながら、精査を行い、必要に応じてサブトレンチを設定し、検出遺構、堆積状況などの記録を作成した。

7月21日からは第2調査区の調査も並行して行い、8月2日までの8日間、8月22日から9月14日までの12日間で第1、第2調査区とTP4、5の調査を終了した。9月14日には埋め戻しも完了し、テントを撤去した。その後9月20日TP6の調査を行い今年度の調査を終了した。

第4節 調査の方法

発掘調査は、幅30cm～3mのトレンチによって遺構・遺物の有無、土の堆積状況や遺構の造成状況の確認を行った。調査の記録は図面と写真によった。設定したトレンチ位置は国家座標を持つ杭を基準にトータルステーションで測量し、その位置を基準として平面実測を行った。写真撮影にはリバーサルフィルム、モノクロフィルムを用い、一部はデジタルカメラも併用した。遺構外の遺物は一括で取り上げた。

基本層序は以下のとおりで、大きく7層に分けられた。第1調査区の平場の土層を基本とした。

I 10YR4/1 褐灰色土	表土	6cm	しまりあり	粘性やや弱	
II 10YR4/3 にぶい黄褐色土	近代の攪乱	12cm	しまりあり	粘性やや弱	～5mm小石微量 ～2cm小石微量
III 10YR5/4 にぶい黄褐色土	遺物包含層	15cm	しまりあり	粘性弱	～2cm小石微量 ～3mm、～1cm小石微～少量 軟質泥岩微量 炭化物微量
IV 10YR5/4 にぶい黄褐色土		4cm	しまりあり	粘性弱	～2cm小石少量
V 10YR6/4 にぶい黄橙色土	地山	10cm	しまり強	粘性弱	砂利層
VI 10YR6/4 にぶい黄橙色土	地山	8cm	しまりややあり	粘性弱	砂層
VII 10YR5/4 にぶい黄褐色土	地山	13cm	しまり強	粘性弱	固砂層
～6/6 ～明黄褐色土					

第2章 檜山城跡の概要

第1節 檜山城跡の立地

檜山城跡の所在する能代市は、日本海に面し、米代川河口部に港をもち、下流域に開けた能代平野に都市域が広がり、河川流域に集落が点在する。檜山城跡は能代平野に接して檜山川の発する丘陵部に位置する。現在の檜山集落の裏山のようなかたちで見下ろす霧山にあったのが檜山城跡で、霧山城とも呼ばれていた。現在公園となっている部分が古城と呼ばれる場所にあたる。

米代川河口からは約12km内陸に位置し、標高は最高所の将軍山が約164m、古城地区の通称本丸跡が約146mほどである。地質は女川層の未固結泥岩が基盤層として広く確認されているほか、古城地区には20万年前の海成層である石倉山層が確認でき、更にその上に15万年前に形成された古砂丘が堆積している場所も見られる。石倉山層は図3の地質図に拠れば、沢を挟んだ北側尾根上の中館と呼ばれる周辺にも分布している。未固結泥岩のことを地元ではアマジャクと呼んでおり、本報告書では土層注記等の表記に用いた箇所もある。

檜山城跡を中心として地理的特徴をみると、史跡指定されている丘陵の北側裾野を檜山川が西流し、その対岸、檜山城跡の北東方向に、檜山城を築城したとされる安東忠季の菩提寺国清寺の跡があり、その東の丘陵に安東愛季の再興した八幡神社が現存する。

西裾側は現在の檜山の町並みや、近世多賀谷氏の居館のあった茶臼山があり、その西を近世絵図にむじりき川として描かれる小川が流れる。これらを挟んだ対岸の丘陵は茶臼館跡であり、一連の檜山城下町を形成していたと見られる。東側には沢が入り込んで城を区画し、南側も急峻な沢地形で山城の要害的機能を生み出している。一方で、南東側には尾根上を通して三種町岩川方面へと抜ける山道がある。城の防御機能としては地形が緩やかであるため、大堀切がつくられ、城を画している。

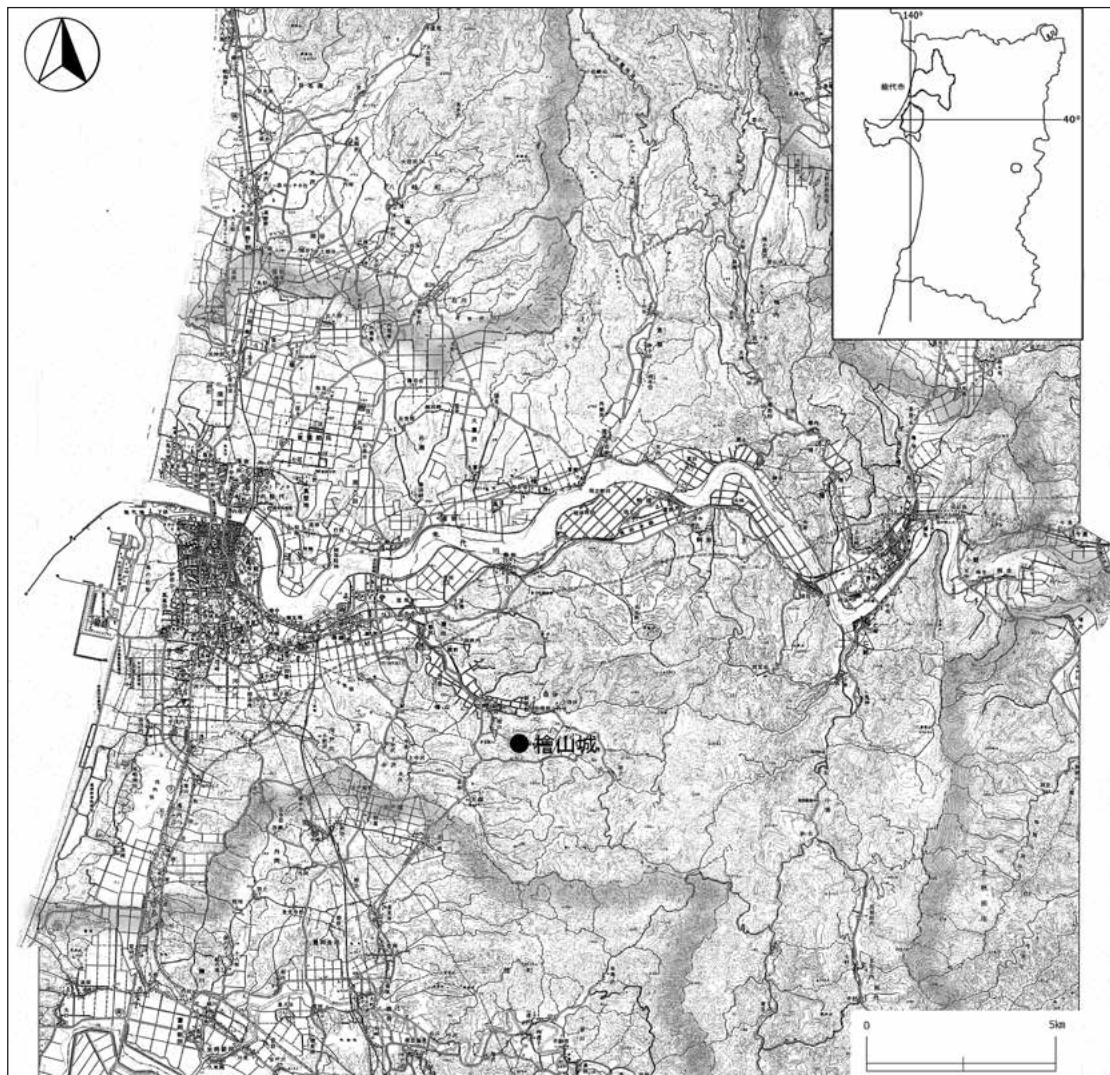


図1 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

檜山川流域とその周辺には旧石器時代から近世までの遺跡が存在する。檜山城の使用された中世に属する遺跡は19遺跡あり、安東氏に関わる伝承を持つ遺跡も含まれる。

檜山城が築城された年代を、近世史料である『新羅之記録』の記述を元に明応4年(1495年)とするのが通説であるが、同時代史料からは、檜山城や檜山集落の存在は現在のところ確認できない。それ以前には、能代平野周辺が元慶2年(878年)に起きた民衆蜂起の際の野代村の所在地であるとも考えられ、檜山城跡とともに史跡を構成する大館跡(11)は、当時の律令国家側の拠点「野代宮(のしろたむろ)」の擬定地ともされる。ところが能代市管内では9世紀後半の遺跡数は少なく、檜山周辺でも集落や鉄生産遺跡(37、38)、祭祀遺跡(33)などの10世紀の遺跡が多く見られる。なお、檜山川流域のほ場からは、9世紀に属する遺物も見つかっているが、詳細は不明である。

その後、檜山地域でも15世紀までの須恵器系陶器は散見されるが、羽州街道の前身となる街道や集落、城館の有無についての情報が少ないのが実状である。檜山城の築城後には、安東氏代々の居城として、城下に町場が形成、あるいは拡大していったことが想定される。近世以前には街道がある程度整備され、檜山川を使った舟運も含めた交通体系が出来上がっていたと思われる。

北方と関係の深い、地域色の濃い信仰として古四王神社の存在があり、現在は檜山神社となっている古四王神社が近世には茶臼館跡(19)にあったことが江戸期の絵図から読み取れる。

このほかにも中世の痕跡として、国清寺跡(16)や母体八幡神社、安東氏代々の菩提寺など縁の深い社寺が残るほか、檜山舞と呼ばれる番楽が母体地区に伝わっている。米代川流域の鶴形地区から河口の能代市街地まで、安東氏との結びつきが想定される日吉神社や、そのほか文化財や伝承などの分布が安東氏の存在を示している。

近世には佐竹氏の置いた多賀谷氏の居館(18)がつくられる一方で、檜山城は元和6年に破却された。安東氏時代に町立てされたといわれる米代川河口の野代湊は佐竹氏によって一層整備され、檜山地区でも羽州街道や一里塚(8)、松並木などが整備され、今もその痕跡を見ることができる。

【参考資料】

- 秋田県教育委員会 2006 『樋口遺跡』 秋田県文化財調査報告書第411集
2007 『鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第422集
2011 『秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ—檜山安東氏城館跡(大館跡)調査—』
大沢禮、鯨岡明、栗田泰夫、高安泰助、平山次郎 1985 『森岳地域の地質』 地域地質研究報告 地質調査所
工藤英美 1987 「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』 4号
1992 「能代平野の成り立ち(その一)」『年報 能代市史研究』 2号
能代市 1994 『能代市史 資料編 考古』
2000 『能代市史 特別編 自然』
能代市教育委員会 1978 『大館遺跡発掘調査報告書』
『享保十三年 檜山一円御絵図』
『天保二年檜山絵図』

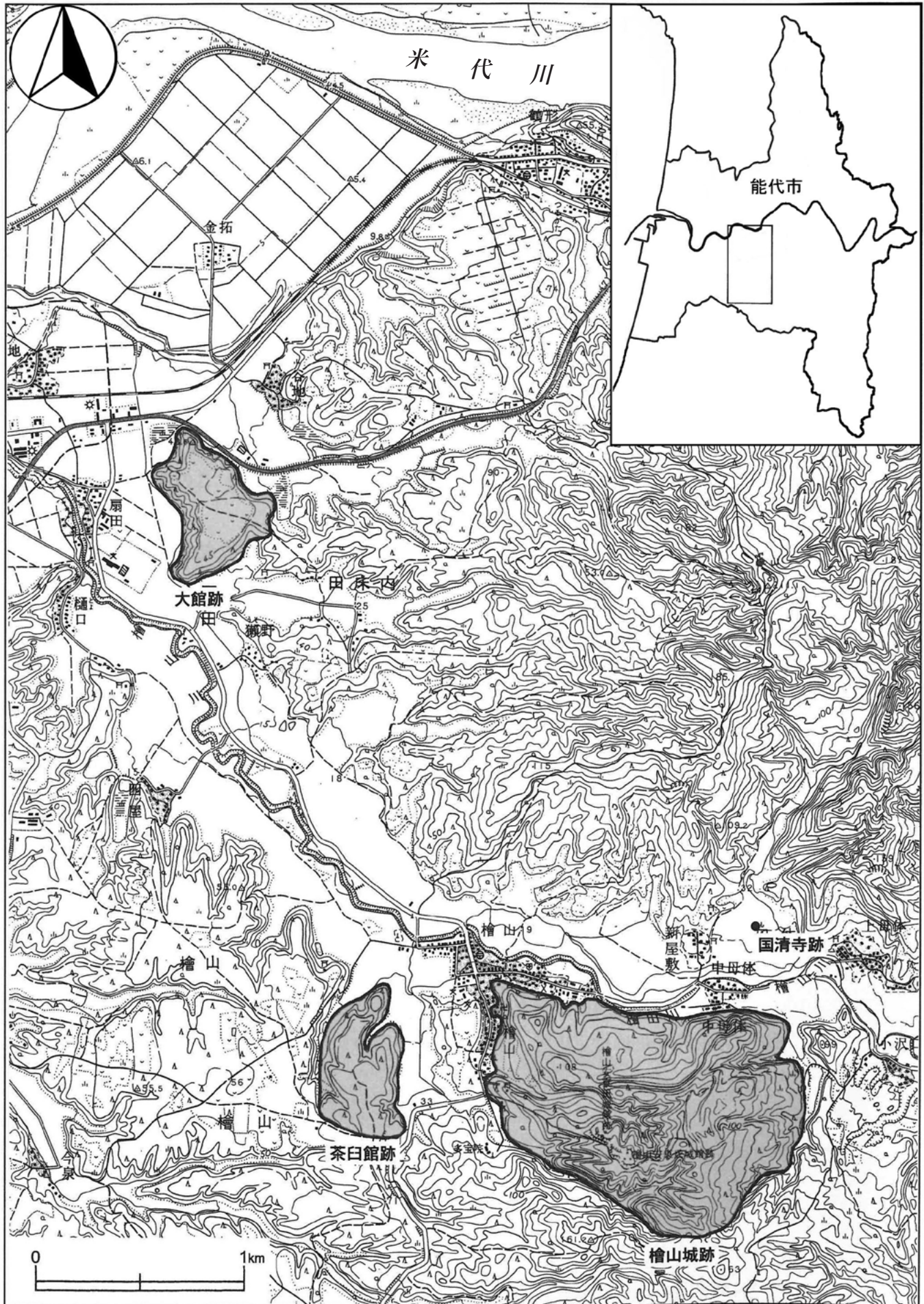
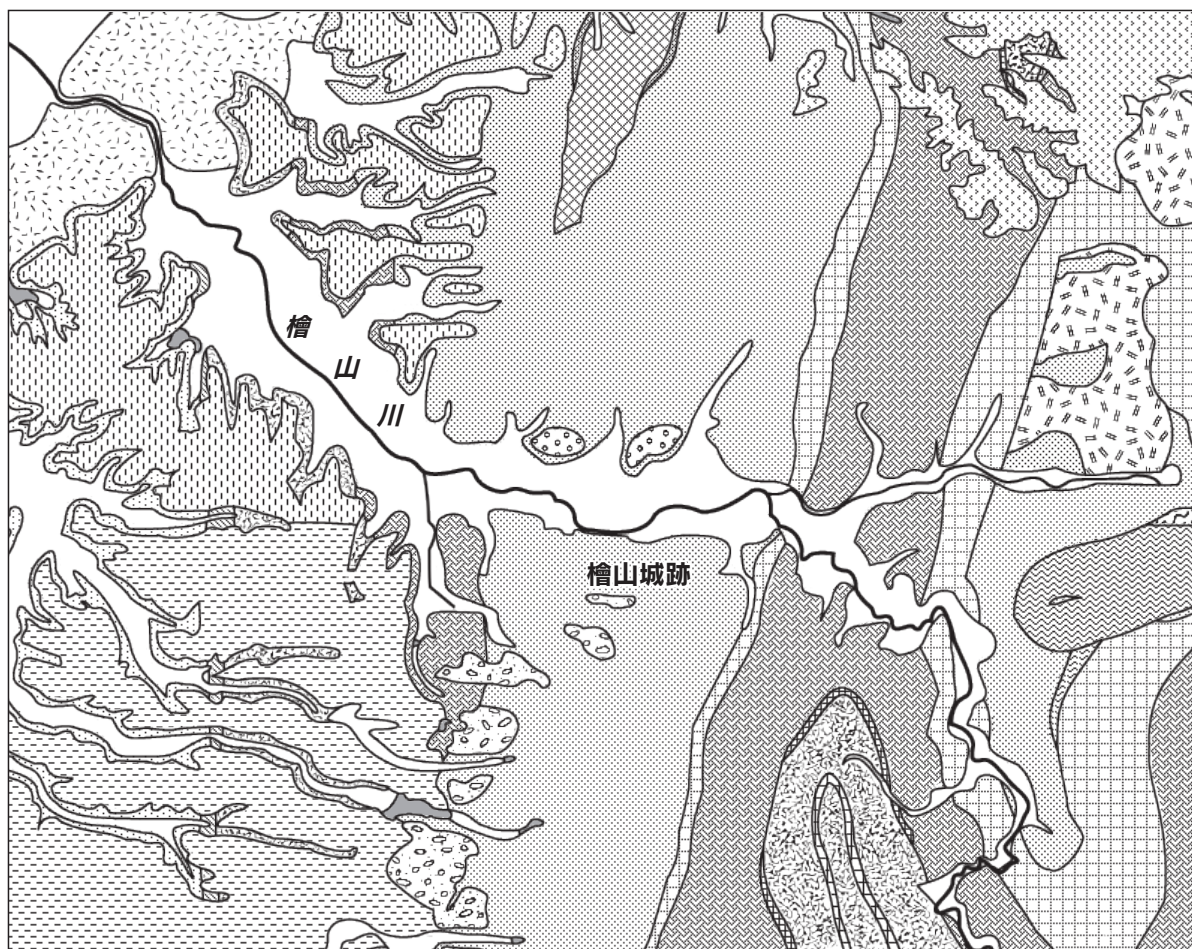


図2 史跡檜山安東氏城館跡位置図



	沖積層		船川層上部七座凝灰岩部層
	毛馬内段丘堆積物		船川層主部
	低位Ⅰ段丘堆積物		船川層下部七座凝灰岩部層
	渦西層 砂及び礫（泥及び泥炭を伴う）		茂谷山流紋岩
	渦西層 礫・砂及び泥（亜炭を伴う）		素波里安山岩
	高位Ⅰ段丘堆積物		素波里安山岩 角閃石デイスサイト溶岩
	石倉山層		素波里安山岩 紫蘇輝石普通輝石角閃石安山岩溶岩
	中沢層		女川層
	笹岡層		早口川層一ノ又沢玄武岩部層
	天徳寺層 シルト岩（砂岩・礫岩・酸性凝灰岩及び砂質凝灰岩を伴う）		早口川層主部
	天徳寺層 酸性凝灰岩及び砂質凝灰岩		池沼

（『能代市史 特別編 自然』付図をもとにトレースして改変）

図3 檜山城跡周辺地質図

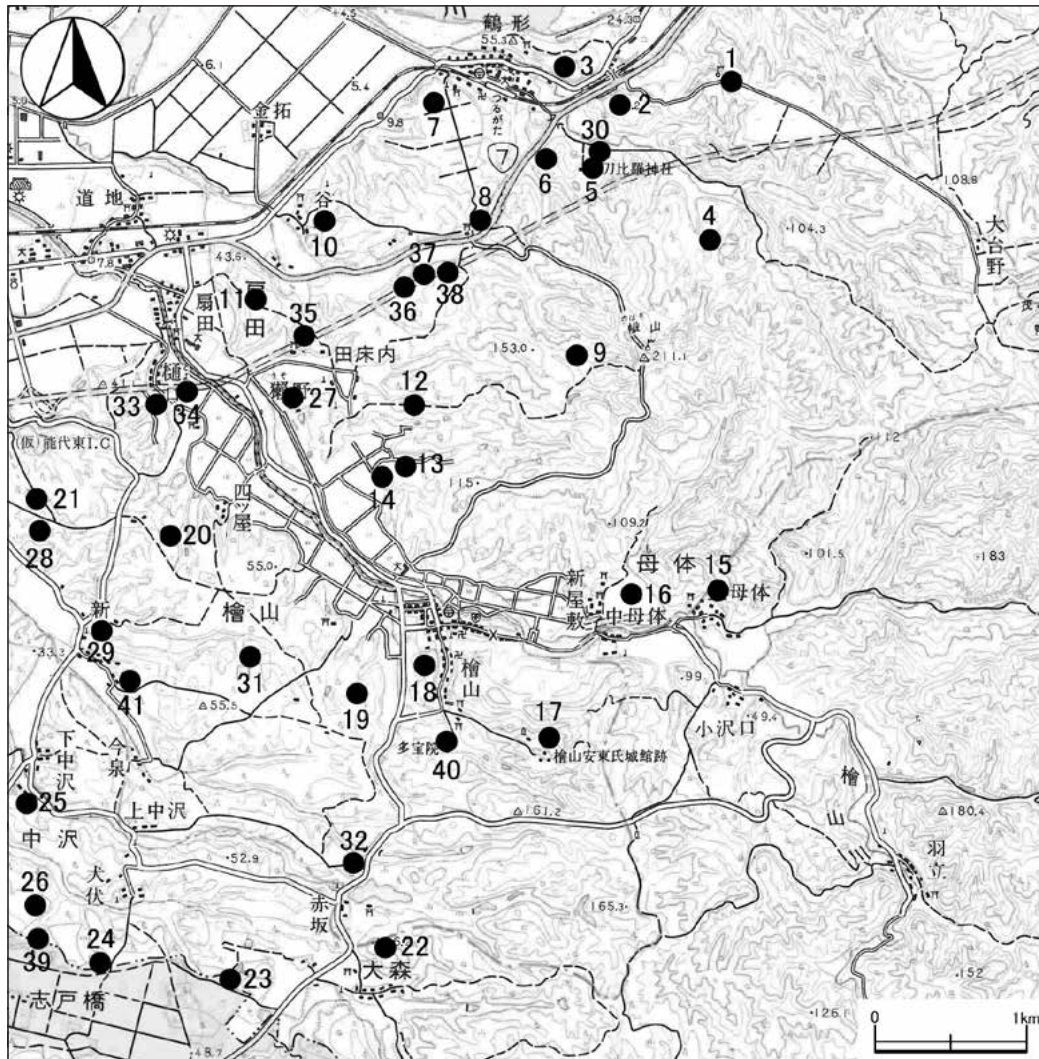


図4 周辺遺跡分布図

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代
1	2-92	鶴形大台野遺跡	能代市字大台野	縄文	21	2-114	苗代沢遺跡	能代市鹹渕字苗代沢	古代、中世
2	2-94	赤館跡	能代市字外堤	中世	22	2-115	大森館跡	能代市大森字大森	中世
3	2-95	比丘尼館跡	能代市字外堤	中世	23	2-116	大森大台野遺跡	能代市大森字大台野	縄文
4	2-96	山神社前遺跡	能代市山神社前	縄文、古代	24	2-117	中沢大台野遺跡	能代市大森字大台野	縄文
5	2-97	鶴形窯跡	能代市字山崎	近世	25	2-118	古館跡	能代市中沢字蟻古館	古代、中世
6	2-98	大館跡	能代市字戸草沢	古代、中世	26	2-126	蟻ノ台Ⅷ遺跡	能代市中沢字蟻の台	縄文
7	2-99	上ノ山遺跡	能代市字上の山台	縄文、古代 中世、近世	27	2-169	獺野遺跡	能代市扇田字獺野	中世
8	2-100	鴨巣一里塚	能代市字上の山、字谷地上	近世	28	2-171	新田沢遺跡	能代市松山字新田沢	縄文
9	2-101	八重堀館跡	能代市字山神社前	古代、中世	29	2-172	中瀬戸沢遺跡	能代市松山字中瀬戸沢	古代
10	2-102	谷地館跡	能代市字田中谷地	古代、中世	30	2-173	山崎遺跡	能代市字山崎	古代
11	2-103	大館跡	能代市田床内字大館	古代、中世	31	2-180	上平張遺跡	能代市松山字上平張	中世
12	2-104	二タ又遺跡	能代市田床内字二タ又	古代	32	2-195	瓶長根遺跡	能代市中沢字瓶長根	縄文
13	2-105	三岳館跡	能代市松山字上館	縄文、古代 中世	33	2-199	樋口遺跡	能代市扇田字樋口	古代
14	2-106	三岳遺跡	能代市松山字上館	縄文	34	2-200	岩ノ目遺跡	能代市扇田字岩ノ目	縄文、古代
15	2-107	上母体遺跡	能代市母体字上母体家の下	縄文	35	2-201	縄手下遺跡	能代市田床内字縄手下	旧石器、縄文、古代
16	2-108	国清寺跡	能代市松山字蟹沢	中世	36	2-202	鴨巣館跡	能代市田床内字鴨巣	古代、中世 近世
17	2-109	檜山城跡	能代市松山字古城	中世、近世	37	2-203	鴨巣Ⅰ遺跡	能代市字鴨巣	古代
18	2-110	多賀谷居館跡	能代市松山字霧山下	縄文、古代 中世、近世	38	2-204	鴨巣Ⅱ遺跡	能代市字鴨巣	縄文、平安
19	2-111	茶臼館跡	能代市松山字茶臼館	古代、中世	39	2-206	割道Ⅲ遺跡	能代市中沢字大台野	縄文
20	2-113	四ツ屋台遺跡	能代市扇田字四ツ屋台	古代	40	2-207	小間木遺跡	能代市松山字小間木	中世、近世
					41	2-210	堤下遺跡	能代市松山字堤下	古代

表1 周辺遺跡一覧

第3章 調査の記録

第1節 検出遺構と出土遺物

第1次調査は、通称「三の丸」を第1調査区とし、通称「本丸」下西から南側を第2調査区に設定して実施した。第1調査区は古城地区の主要な曲輪の一つである通称「三の丸」を調査することで、城の構築時期や、古城地区の性格の一端を解明するために建物の有無の確認、また初めての発掘調査であるため、土の堆積状況の把握を目指して設定した。第2調査区は、土の堆積状況や、地表面でも観察できる土塁跡や堀底道跡の造成の状況などを確認するために設定した。

1 第1調査区

トレンチ1(第6図)

トレンチは1、1A、1Bを設定した。通称「三の丸」の先端にある通称「櫓台」の高まりの基部にあたる位置に設定した。外側の帯曲輪から三の丸主部への通路状部分があり、その通路から主部へと入った部分も含んでいる。調査区の標高は約137.5～138.5mほどである。

検出遺構

IV層中で柱穴様ピット2基を検出した。

出土遺物(図11、図版14)

瀬戸美濃大窯端反皿あるいは丸皿体部、唐津、中国産の染付皿等が出土した。また近世陶磁器、鉄製品が出土した。

トレンチ2(第7、8図)

トレンチは2、2A、2Bを設定した。通称「三の丸」主部の平場、中央部分より先端寄りにあたる。一部に遺物包含層がみられた。2Aは平場の縁に近く、硬い砂の地山の上に土の堆積がみられた。人為的な盛土とみられる。2Bは攪乱されている。遺物包含層は攪乱されている部分との区別が判然としなかった。調査区の標高は約137.9m～138.2mほどである。

検出遺構

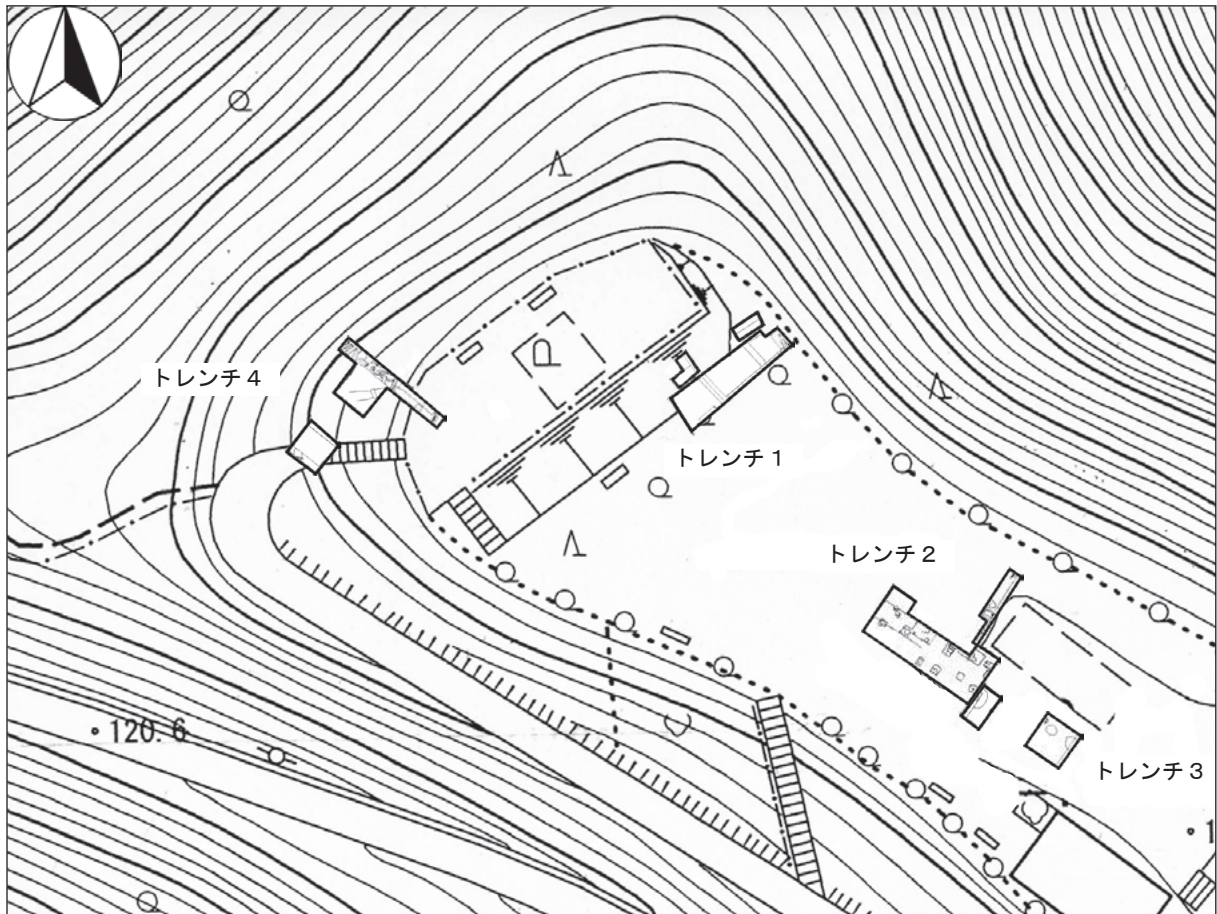
サブトレンチを設定した部分ではV層、VI層上面で複数の柱穴様ピットが検出された。2Aからは土坑3基、柱穴様ピット2基が検出された。また、溝状プランがサブトレ内から検出されている。2Bから柱穴様ピットが1基確認された。

出土遺物(図12、図版14)

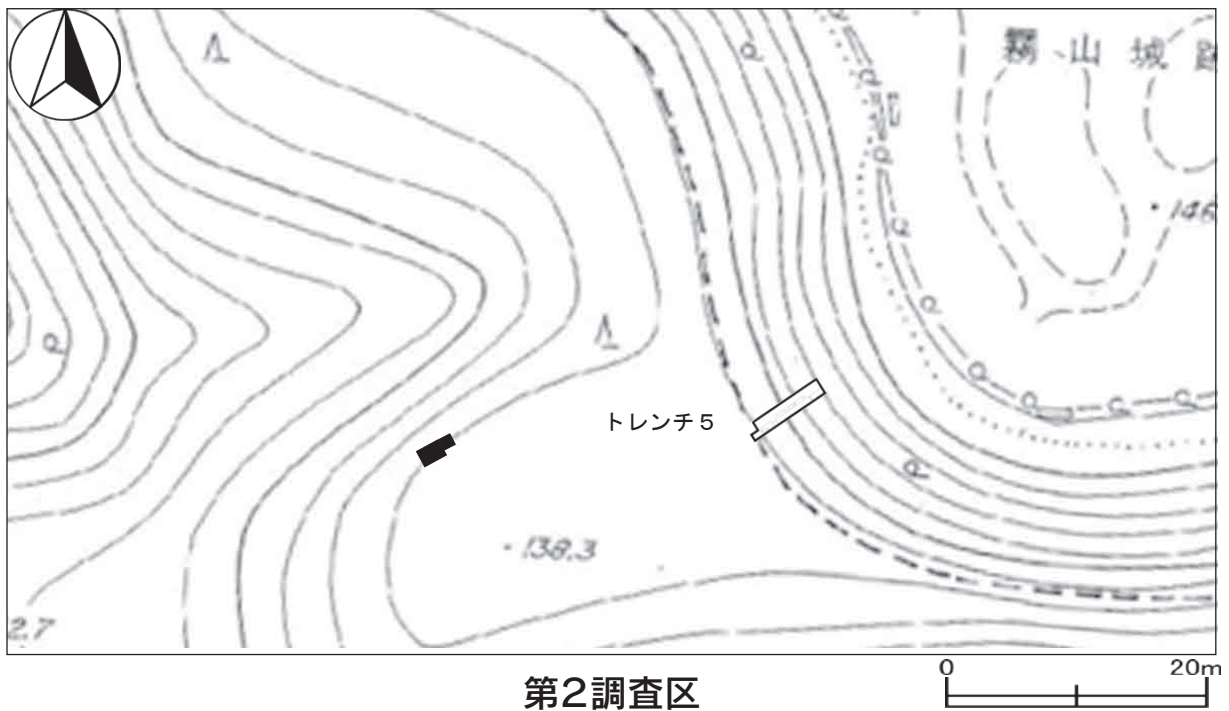
大窯の天目茶碗底部、丸皿、中国産の青磁口縁部1点、染付皿等が出土した。また、甕か壺の体部1点を含む近世陶磁器や鉄製品が出土した。

トレンチ3(第8図)

通称「三の丸」主部の平場、トレンチ2の南東側に設定した。地表面の標高は約138.2mほどである。攪乱がひどく、公園として使われた時期の造成と思われる。



第1 調査区



第2調査区

図5 トレンチ位置図

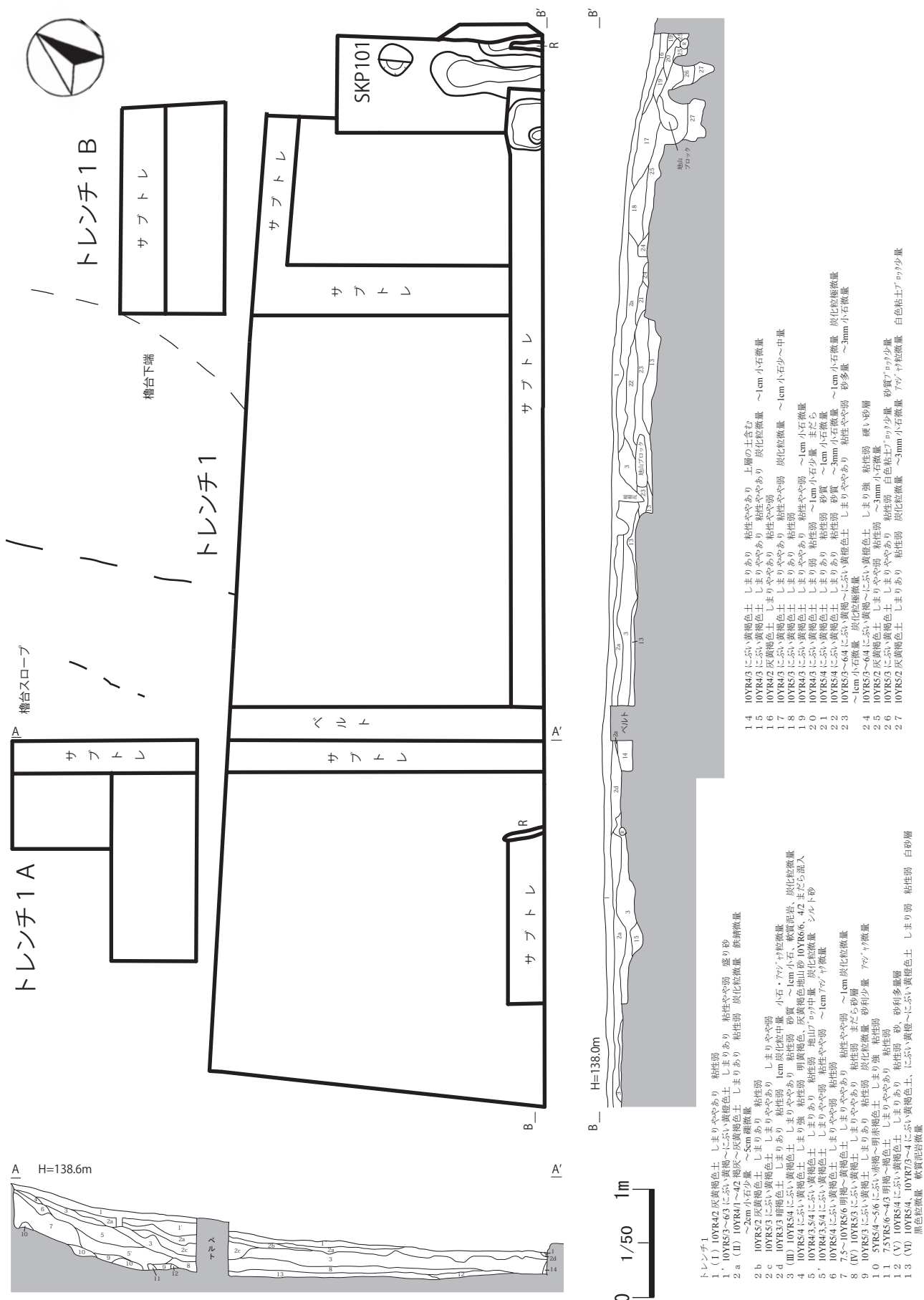


図6 トレンチ1、1A、1B

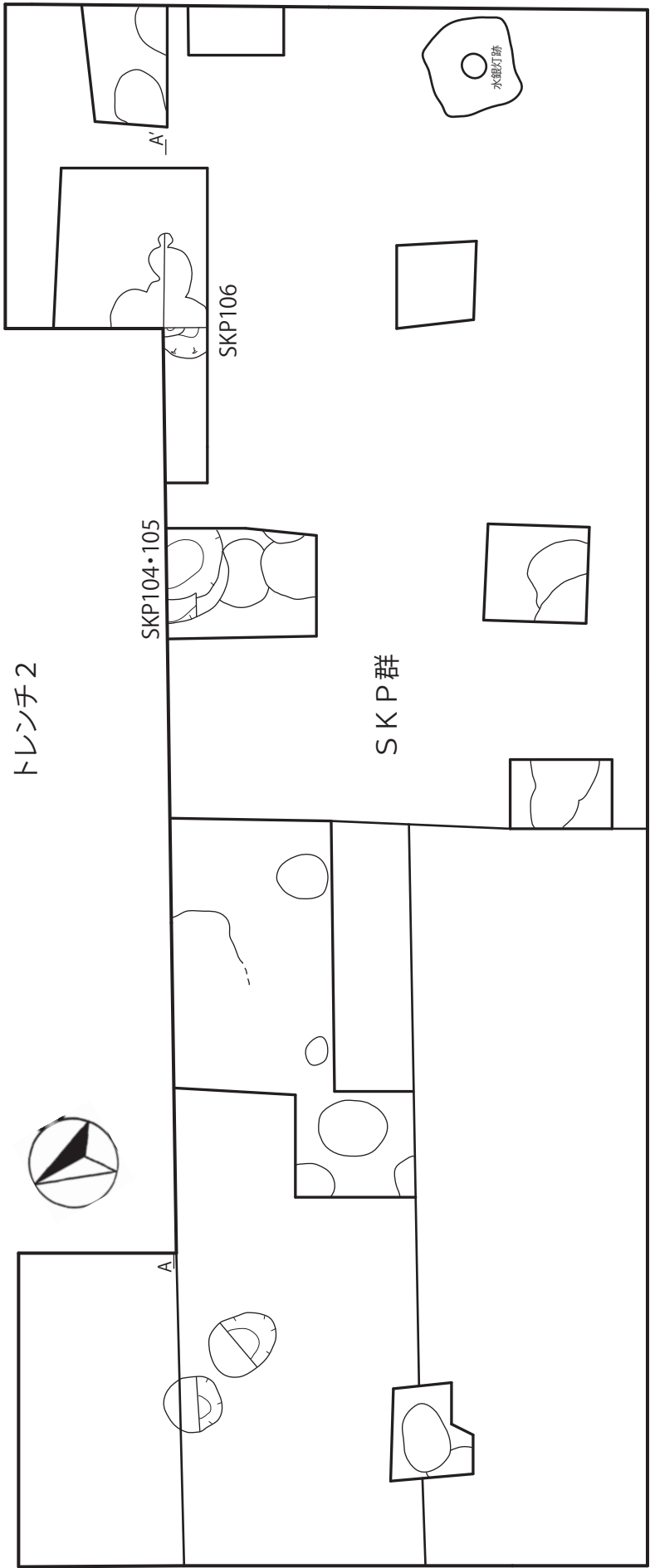
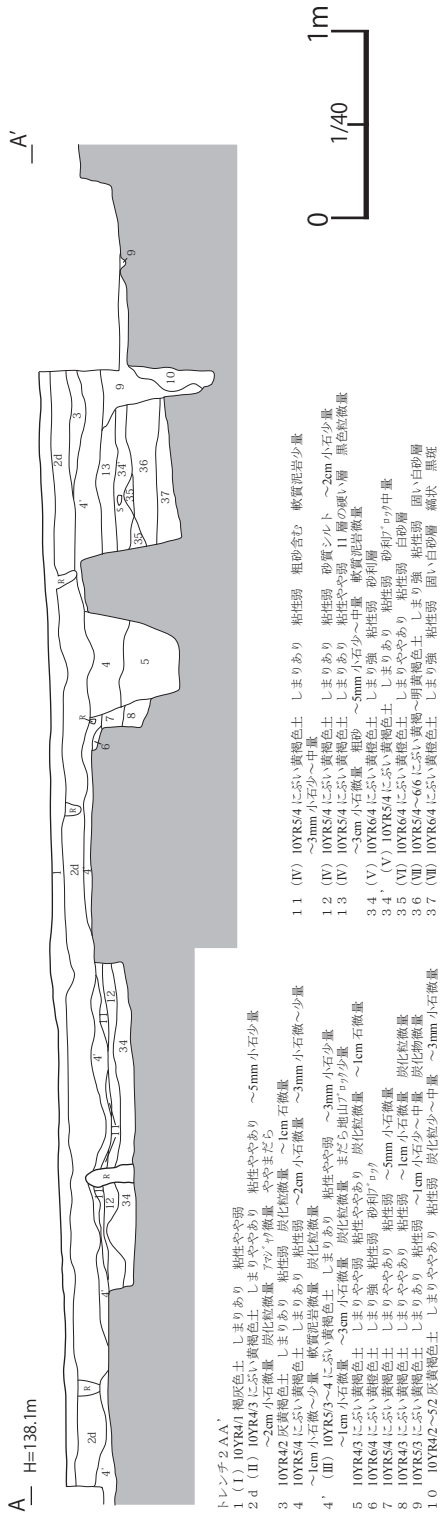


図7 トレンチ2



検出遺構

柱穴様ピットが¹基検出された。

出土遺物(図12、図版14)

大窯の折縁皿口縁部、唐津、朝鮮産の碗などが出土した。近世以降の陶磁器も出土した。

トレンチ4(第9図)

トレンチは4、4Aを設定した。通称「三の丸」の先端、「櫓台」の外側の帯曲輪にあたる。遊歩道のルート上で、古道の有無を確認するために設定した。4の南東側に「櫓台」基部から曲輪先端までのサブトレンチを設定して造成の様子を確認することも目的とした。調査区の標高は、約134.9～138.2mほどである。

検出遺構

「櫓台」の切岸の一部が確認できた。また、地山砂の上にも砂の堆積があり、現在の地表面でみられる帯曲輪の造成の前に、平場でなく数段の犬走り状の曲輪が形成されていた可能性がある。2段の切岸には浅い溝が付属する。また、柱穴様ピット2基が検出された。

中段の凹凸はプランや覆土が明確でないため遺構としての掘り込みではないと判断した。同地点からは15cm前後の礫が4点出土した。

現状の平場の、櫓台切岸の裾部分に近い個所で、ほぼ水平の版築状の堆積がみつかったが、自然堆積のラミナとの区別ができなかった。同堆積は、崩落した部分が見られ、地すべり後に現在地表面で観察できる曲輪が造成されている。

出土遺物

表土中から近世以降の磁器碗が出土した。

2 第2調査区**トレンチ5(第10図)**

通称「本丸」下西側にあたる、現状で遊歩道として使用している箇所に、堀底道と土塁跡の造成を探るためにトレンチを設定した。調査区の標高は、約137.8～139.4mほどである。

検出遺構

堀底道は現地表面から約78cm掘り込まれていることが確認された。堀の形態としてはいびつな箱堀状で、地表面から65cmほどに1枚目の硬化面が見られる。もっとも広い1枚目の硬化面で道幅は約2.18mである。その上は攪乱されているが、道幅1m以上残存する2面が確認できる。その上にも3面ほどは確認できるが、土層断面では東側が大きく攪乱されているため幅は不明である。ただし痕跡としては、比較的上方で硬化範囲が面的に確認できている。

土塁は、尾根を切って造成する際に、掘り残された部分を基礎にして、構築されている。土塁上に柵や柱穴列などの痕跡は見られなかった。堀切の掘り込み底面から、土塁盛土までの比高差は約2.15mである。なお、土塁の西側曲輪の造成時の比高差は未調査である。

出土遺物(図12、図版14)

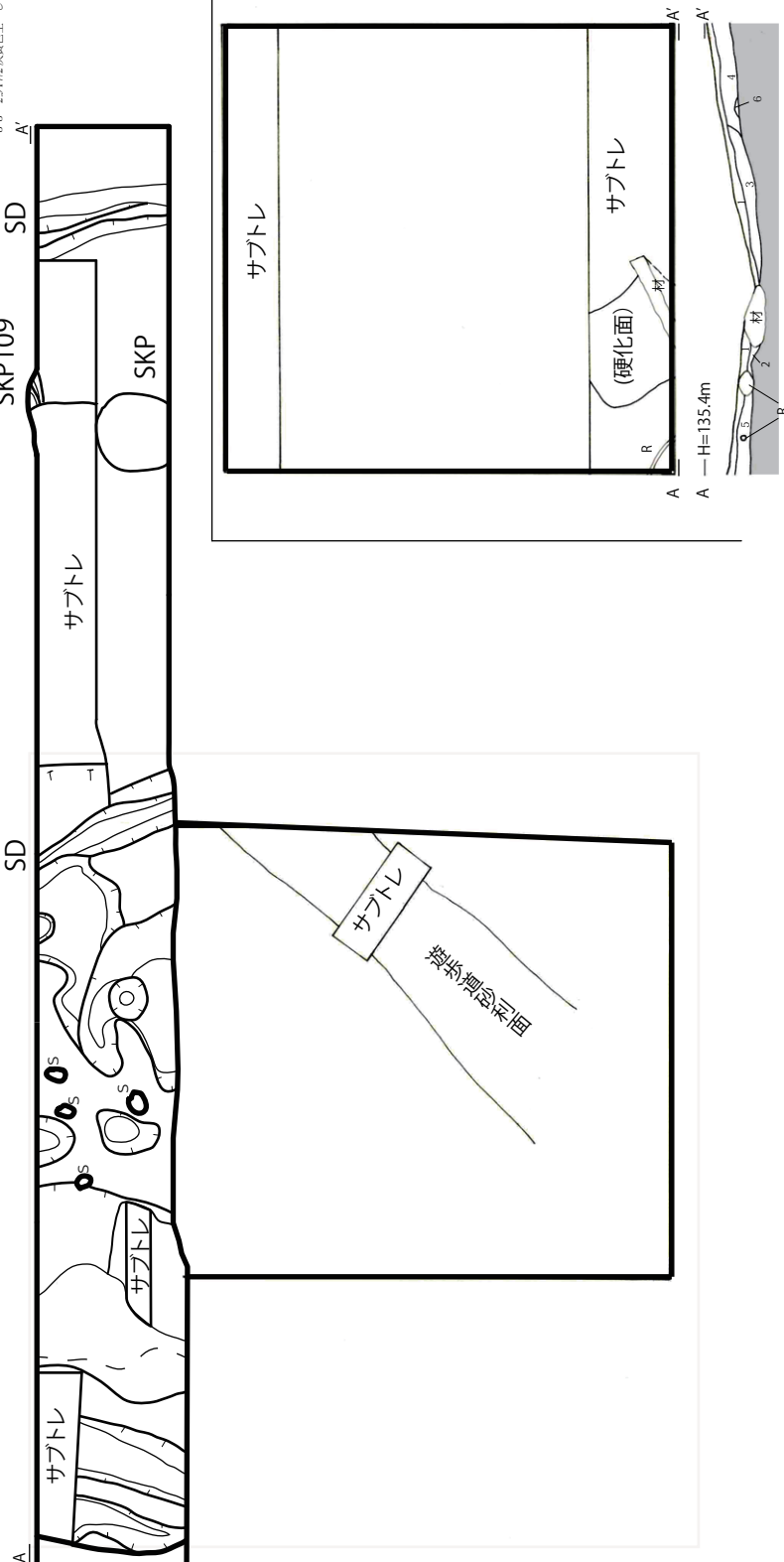
中国産染付K群碗1点が出土した。

トレンチ4

This topographic map illustrates the terrain of Trench 4. The map features a series of contour lines representing elevation changes. Key elevation points are marked with numbers: 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100. The map also shows a shaded area representing a specific geological feature or boundary. The overall shape of the trench is elongated and irregular, with various sub-depressions and ridges.

- [illegible]

図9 トレンチ4A、4B





トレンチ5

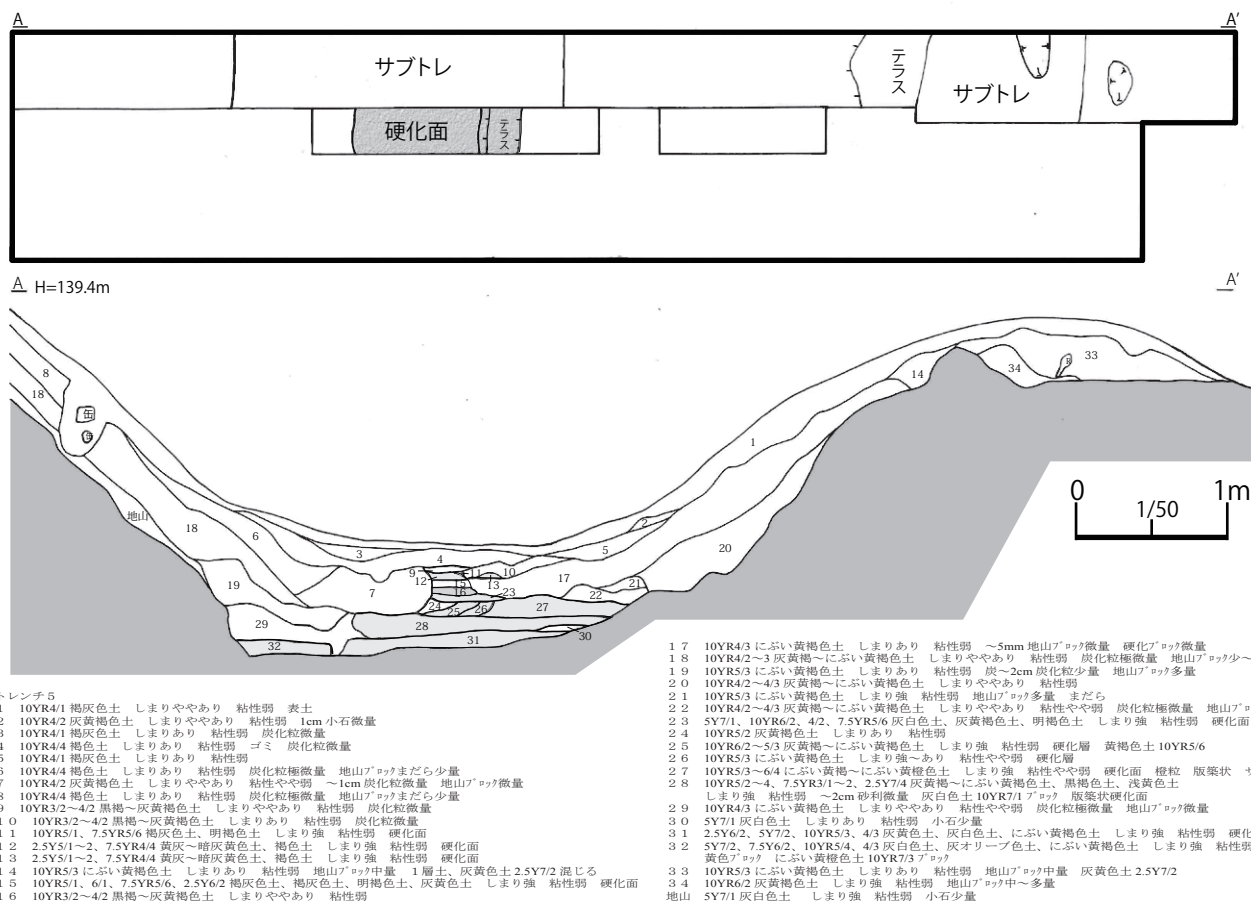


図10 トレンチ5

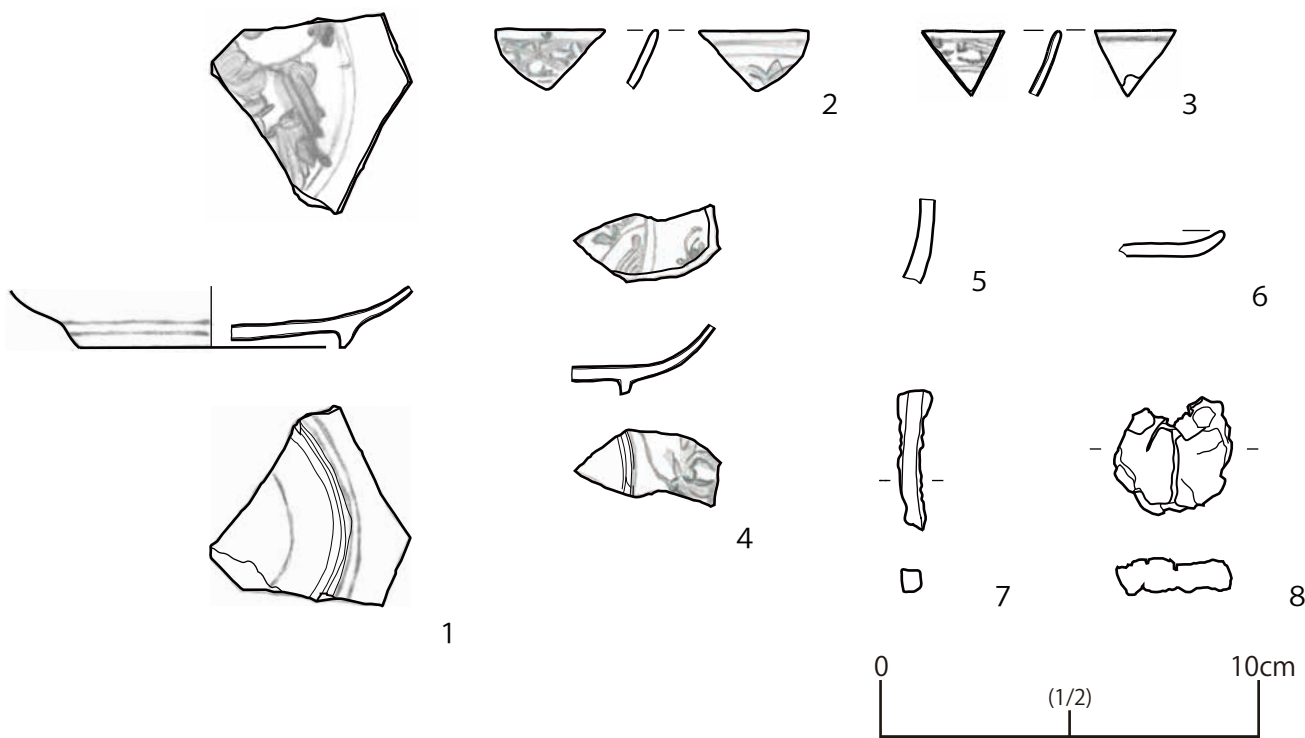


図11 出土遺物(1)

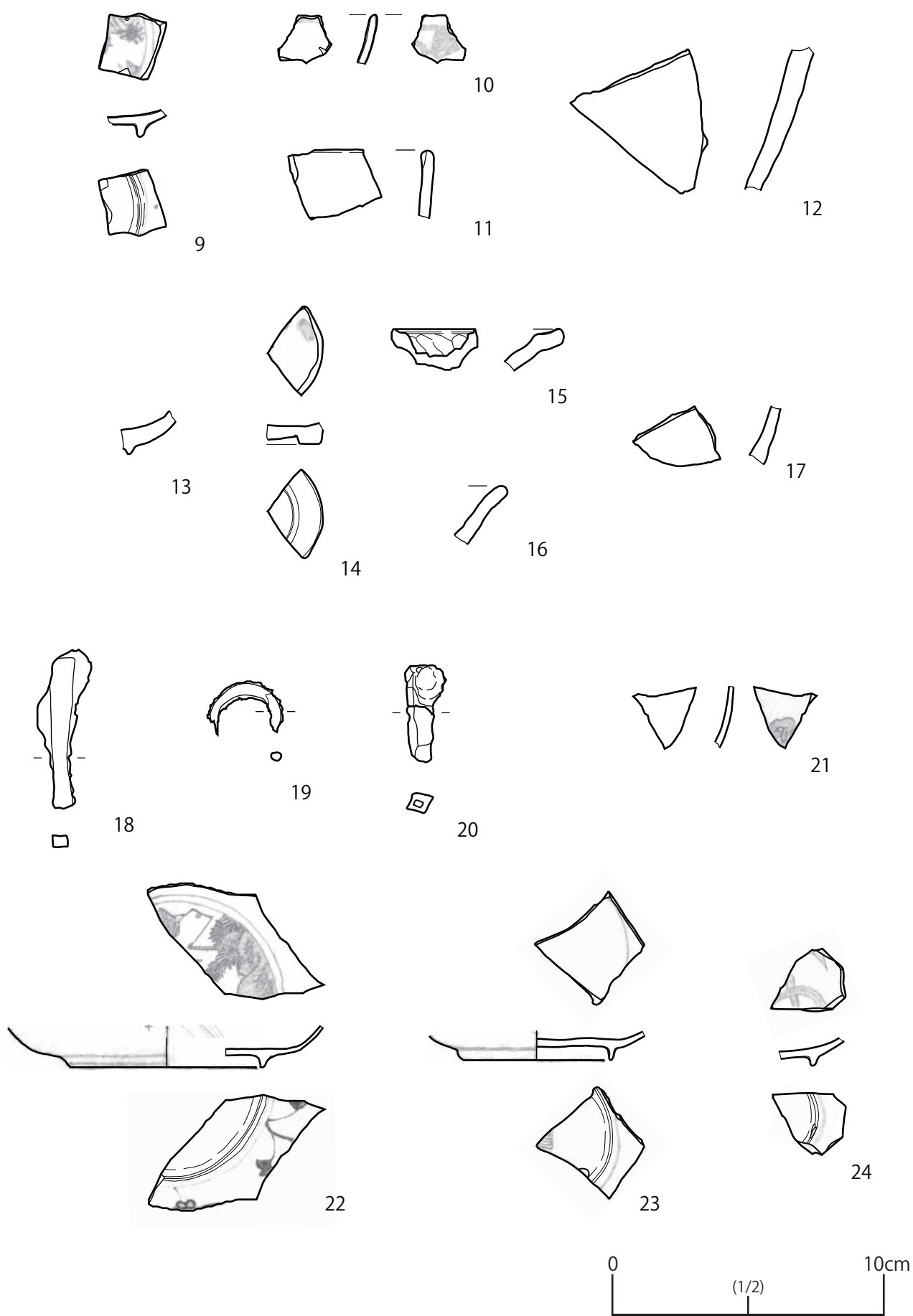


図12 出土遺物(2)

第2節 現状変更判断試掘調査

発掘調査のための基準杭設置と、檜山城跡の整備の一環である案内板、車止めを設置する箇所について、覆土堆積の状況を確認するために行った。2 m×3 m以内のテストピット(以下TP)を設定し、確認、記録保存の後、埋め戻して原状に復旧した。

TP 1 (第14、15図)

基準杭設置のため遺構の有無を確認するために設定した。第2調査区の西側に延びる尾根上の平場に相当する。調査区の標高は約138.3mである。

検出遺構

1基の柱穴様ピットを検出した。2層中から掘り込まれる。時期は不明である。

出土遺物

陶磁器が3点出土した。1点は唐津、1点は中国産の染付である。

TP 2 (第14図)

基準杭設置のため遺構の有無を確認するために設定した。通称「三の丸」の南東側に位置する。調査区の標高は約138.7mである。

検出遺構

柱穴様ピットが1基検出された。3層中から掘り込まれる。遺物は出土しなかった。

TP 3 (第14、15図)

基準杭設置のため遺構の有無を確認するために設定した。通称「二の丸」から西側に延びる尾根上の平場に相当する。地表面の観察からは時期不明の道跡が調査区北側に確認できる。調査区の標高は約137.1mである。

検出遺構

3基の柱穴様ピットが確認された。1基は2層中から掘り込まれる。

出土遺物

須恵器系陶器の播鉢、中国産染付が出土した。播鉢は10条1単位の卸目を持つ。焼成は不良でロクロも粗い。

TP 4 (第15図)

車止め設置予定箇所について遺構の有無を確認するために設定した。通称「二の丸」方面から、第2調査区である本丸下の堀底道に向かう現状の遊歩道上に位置する。調査区は標高約136.9mから137.5mの緩やかな斜面である。

検出遺構

柱穴様ピット6基、溝跡1条、道路跡の硬化面が検出された。硬化面は土層中の6層にあたり、版築状の層が確認できる。

出土遺物

硬化面付近から、鉄滓1点が出土した。

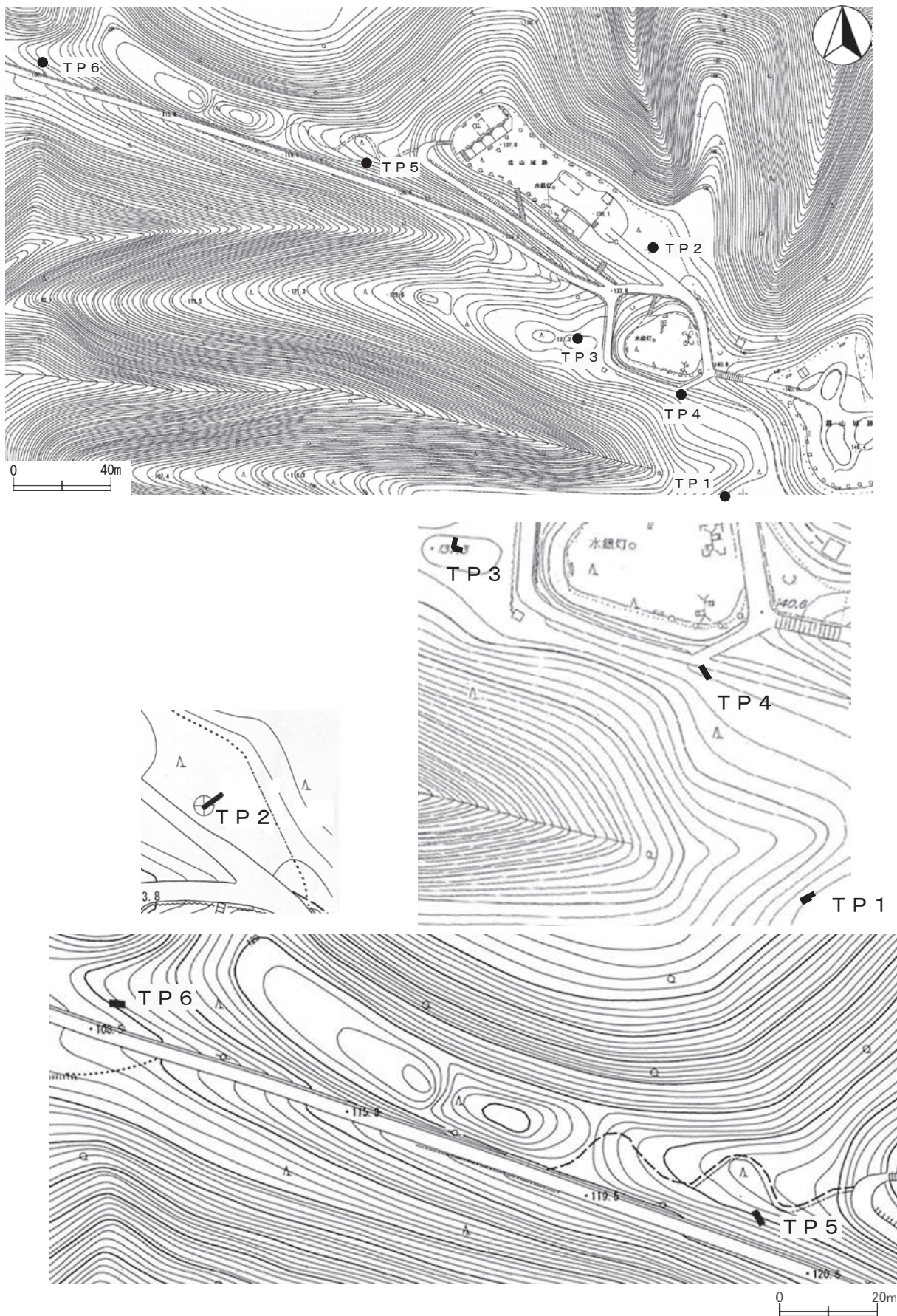
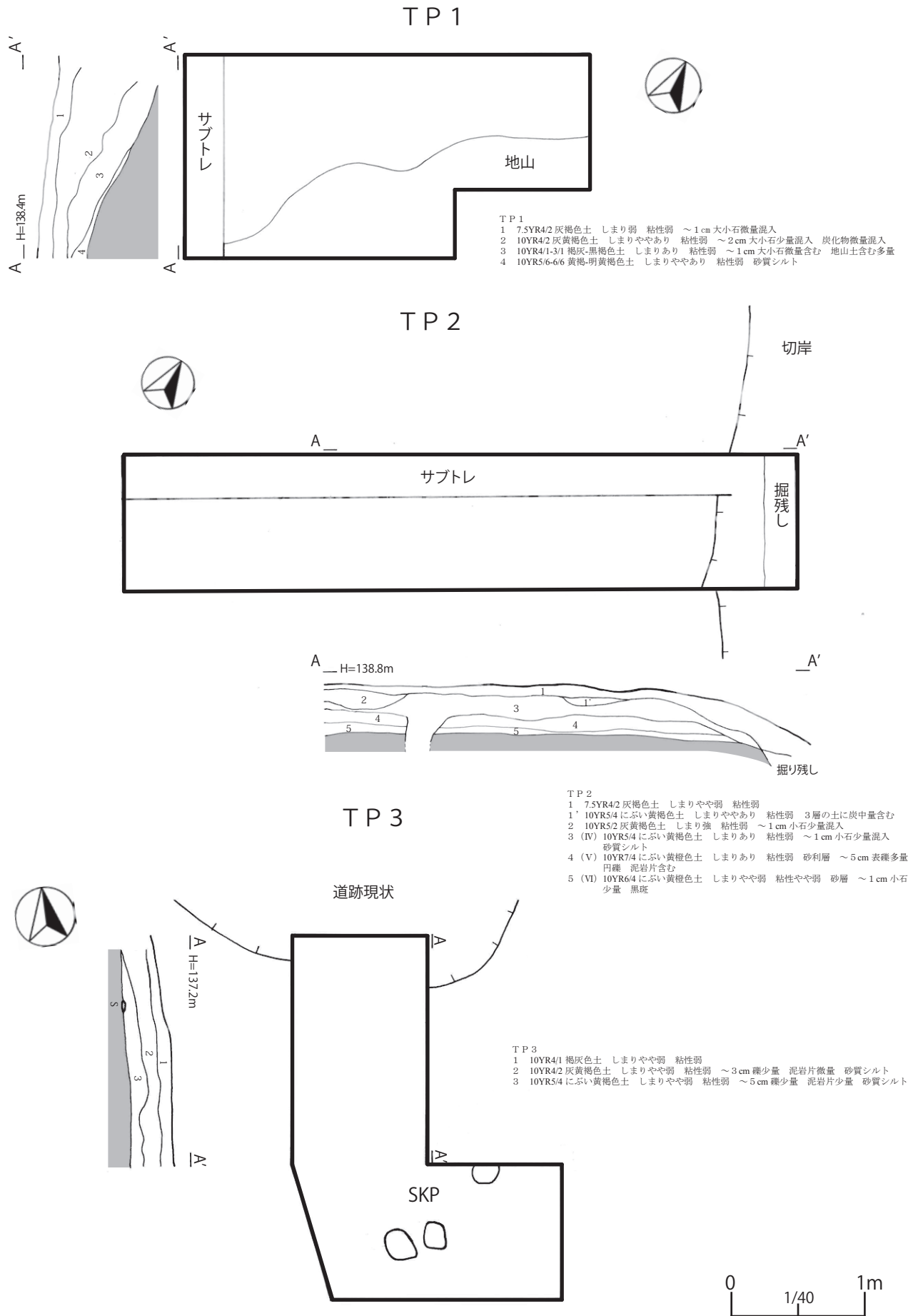


図13 TP(テストピット)位置全体図、TP 1～6位置図



TP5 (第15図)

案内板設置予定箇所について遺構の有無を確認するために設定した。現状アスファルト敷きの登城道からそれて、堀切跡を通り切岸を登る、通称「三の丸」へと続く現状の遊歩道上に位置する。調査区の標高は約122.7mから123.5mで、堀切の法面を含む。

検出遺構

地表面で道と土塁状を呈しており、造成が明らかであるが、覆土の堆積が薄く、攪乱状の溝が検出されたことから、遊歩道を作る際の比較的新しい造成と考えられる。それ以前の道が元となっている痕跡は確認されなかった。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

TP6 (第15図)

案内板設置予定箇所について遺構の有無を確認するために設定した。現状アスファルト敷きの登城道から通称「古寺跡」へ向かう遊歩道の南側に位置する。調査地点の西側には近世には使われたと思われる登城道の遺構が残る。調査区の標高は約109.6mから110.1mで緩やかに傾斜する。

検出遺構

遺構は検出されなかった。調査地点は覆土の堆積が薄く、削平されていることが明らかである。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

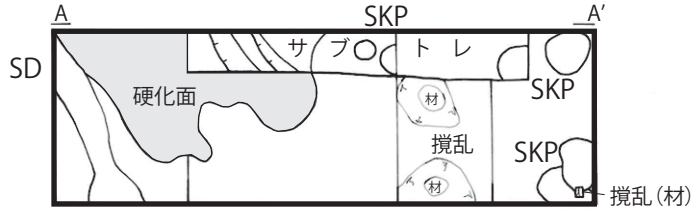
小 結

TP1、2、4の地山は砂で、石倉山層とその上の古期砂丘堆積物に由来する。TP3はややシルト質、TP5で女川層の未固結泥岩、TP6はやや粘土質のシルトとなる。

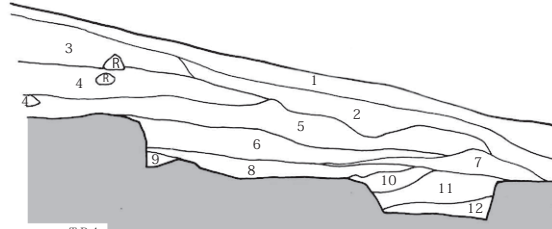
現状変更判断のための調査であり、大部分で遺構のないことが確認できた。各地点について補足すると、TP1は天保絵図に見える江戸時代の「屋敷」の記載がある曲輪の可能性はあるが、痕跡は見られなかった。TP2は、通称「三の丸」の平場、通称「二の丸」寄りで東の縁に近い。一段下にも大きめの曲輪がある。呼称は特に付けられていないが、古城地区の主要な曲輪である可能性がある。上方は攪乱されているが、基本土層Ⅳ～Ⅵ層が確認できる。TP3は通称「二の丸」から伸びる尾根に作られた曲輪に設定した。比較的小さい曲輪から日常的な調理具である挿鉢が出土したことが特徴的である。檜山城が築城された時期を15世紀末と考えると、それ以前の使用も考えられる。TP4の道路硬化面は、第2調査区の堀底道から続くルートである可能性が高い。調査地点は曲輪の境である可能性もあるが、そこから北側の造成が判然としない。史跡指定以前に、通称「二の丸」の曲輪南端を削った可能性や、中世からの道を拡幅して現状の道路としている可能性があり、通称「二の丸」へ続くか、二の丸下を西へ回るルートなのかを明らかにすることも今後重要である。TP5の登城道については、時期が判然としないが、中世からの道を使っていると仮定しても、現在の遊歩道を作るために削平しているとみられる。TP6は削平されているが、その時期は不明である。原地形または城のつくりが判然としない箇所であることも時期の特定を難しくしている。



TP 4



A H=137.6m



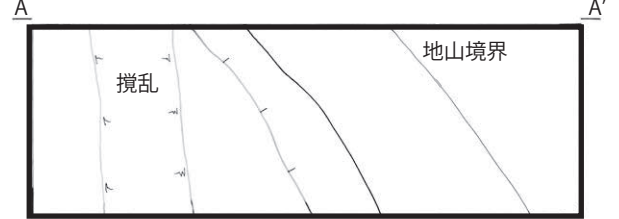
TP 4

- 1 10YR3/1 黒褐色土 表土
- 2 10YR3/2~4/2 黒褐~灰黄褐色土 盛土 しまりあり 粘性あり ~1cm 石、岩
- 3 2.5Y5/3 黄褐色土 盛土 しまり強 粘性ややあり 石、泥粘中量 地山アソビ少量
- 4 10YR3/2~4/2 黒褐~灰黄褐色土 旧表土 しまりあり 粘性やや弱 炭微量 地山アソビ少量
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色土 漸移層 しまりあり 粘性やや弱 地山土中~多量 アソビアソビ少量、岩微量
- 6 10YR6/2-3 灰黄褐~にぶい黄褐色土 硬化面 しまり強 粘性弱
- 7 10YR6/3-4 にぶい黄褐色土 硬化面盛土 しまり強 粘性ややあり 上面に砂 10YR5/2
- 8 7.5YR5/2 灰褐色土 しまりあり 粘性弱 石少量 炭少量 ~1cm 石微量 泥岩アソビ少量
- 9 10YR6/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱 粘土中~多量 10YR8/1~2 炭微量
- 10 10YR5/4~3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱 炭微量 ~1cm 砂 地山アソビ 10YR6/3 少量
- 11 10YR6/2~3 灰黄褐色土~にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱 ~1cm 石中~多量
- 12 (Ⅷ) 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性やや弱 ~2mm 石少量

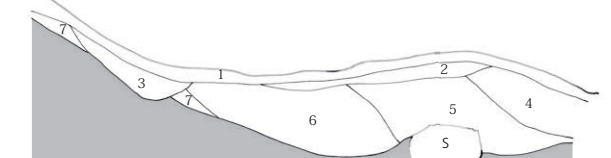


第3章 調査の記録

TP 5



A H=123.5m

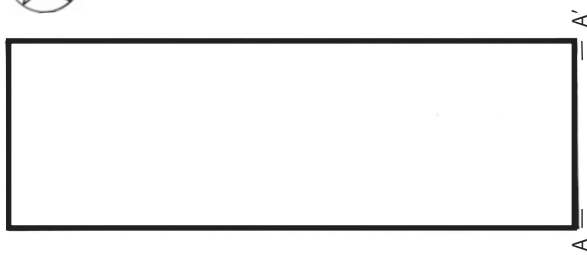


TP 5

- 1 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり 表土
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性弱 ~2cm アソビアソビ中~多量
- 3 10YR4/2~3/2 灰黄褐~黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり ~2cm アソビアソビ中量
- 4 10YR5/2~4/2 灰黄褐色土 しまりあり 粘性やや弱 ~2cm アソビアソビ少量
- 5 10YR5/3~6/4 にぶい黄褐~にぶい黄褐色土 しまりやや弱 粘性あり ~30cm アソビアソビ多量 灰白色土 2.5Y8/2 アソビ
- 6 10YR5/4~5/6 にぶい黄褐~黄褐色土 しまりややあり 粘性やや弱 ~20cm アソビアソビ多量 6/6~7/6 アソビ
- 7 2.5Y7/3 浅黄色土 しまりややあり 粘性ややあり アソビアソビ アソビも含む 灰白色土 アソビ



TP 6



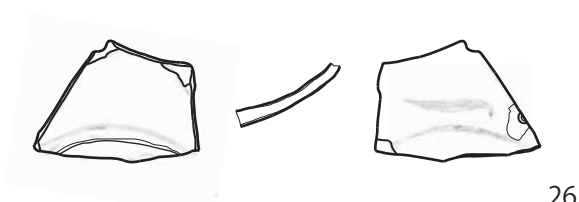
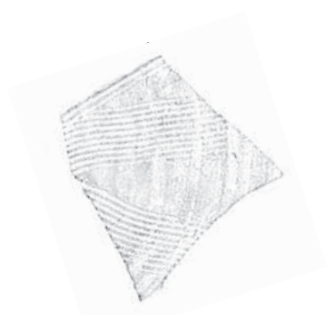
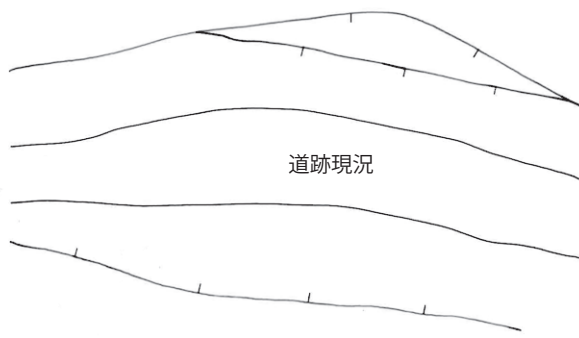
A H=110.2m



TP 6

- 1 10YR3/1 黒褐色土 しまり弱 粘性ややあり
- 1' 10YR4/1 褐灰色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり ~2cm アソビアソビ多量
- 3 10YR6/6 明黄褐色土 しまりややあり 粘性ややあり アソビアソビ~2cm 多量 面~3cm
- 4 10YR6/6、8/2、7.5YR6/8 明黄褐色土、灰白色土、橙褐色土 しまりややあり 粘性あり アソビアソビ 2cm 少量 面で25cm 疎

0 1/40 1m



26



28

25



27

0 1/3 10cm

図15 TP 4-6、TP出土遺物

No.	挿図 No.	図版 No.	表採	出土地点	器種	種別	部位	産地・分類
1	図11	14-1,2		トレンチ1	皿	染付	底部	B2群
2	図11	14-1,2		トレンチ1	皿	染付	口縁部	E群
3	図11	14-1,2		トレンチ1	皿	染付	口縁部	E群
4	図11	14-1,2		トレンチ1	皿	染付	底部	E群
5	図11	14-3,4		トレンチ1	茶入	内外面鉄釉	体部	唐津
6	図11	14-6		トレンチ1	かわらけか	土器	口縁-底部	近世か
9	図12	14-1,2		トレンチ2	皿	染付	底部	B2群
10	図12	14-1,2		トレンチ2	皿	染付	口縁部	
11	図12	14-1,2		トレンチ2A	碗	青磁	口縁部	E群
12	図12	14-3,4		トレンチ2B	壺か甕	陶器	体部	在地 近世
13	図12	14-3,4		トレンチ2	丸皿	大窯2・3	底部	瀬戸美濃
14	図12	14-3,4		トレンチ2	天目茶碗	大窯3	底部	瀬戸美濃
15	図12	14-3,4		トレンチ3	折縁皿	大窯4後半	口縁部	瀬戸美濃
16	図12	14-3,4		トレンチ3			口縁部	唐津
17	図12	14-1,2		トレンチ3	碗	粉青沙器	体部	朝鮮
21	図12	14-1,2		トレンチ5	碗	染付	体部	K群
22	図12	14-8	表採	二の丸法面	皿	染付	底部	E群
23	図12	14-8	表採	霧山下	皿	染付	底部	E群
24	図12	14-8	表採	不明	皿	染付	底部	E群
25	図15	14-7		TP 1			口縁部	唐津
26	図15	14-7		TP 1	皿	染付	体部	漳州窯
27	図15	14-7		TP 3	播鉢	陶器	体-底部	須恵器系
29	—	14-6		TP 1		土師器か	口縁部	土器
30	—	14-6		トレンチ2		土器		土器
31	—	14-8	表採	古寺跡		染付	口縁部	漳州窯C群
32	—	14-7		TP 3	磁器	染付	口縁部	
33	—	14-3,4		トレンチ1	端反皿か丸皿	大窯1～3	体部	瀬戸美濃
34	—	14-3,4		トレンチ2			口縁部	唐津
35	—	14-8	表採	不明	端反皿か丸皿	大窯1・2	底部	瀬戸美濃
36	—	14-8	表採	不明	丸皿	大窯2・3	底部	瀬戸美濃
37	—	14-8	表採	不明	丸皿	大窯3後半	口縁部	瀬戸美濃
38	—	14-8	表採	不明	志野中皿	大窯4後半	口縁部	瀬戸美濃
39	—	14-1,2		トレンチ2				漳州窯
金属製品	挿図 No.	図版 No.		出土地点	器種	種別		
7	図11	14-5		トレンチ1	釘	鉄製品		
8	図11	14-5		トレンチ1	円盤状	鉄製品		
18	図12	14-5		トレンチ2	釘	鉄製品		
19	図12	14-5		トレンチ2	輪状	鉄製品		
20	図12	14-5		トレンチ4	釘	鉄製品		
28	図15	14-7		TP 4		鉄滓		

表2 掲載遺物一覧

第4章 ま と め

1. 出土遺物

檜山城跡の第1次調査では、中世に属する貿易陶磁器、国産陶器や、近世以降の陶磁器、時期不明の鉄製品や、土器、鉄滓などが出土した。中世を主として、時期不明を含む遺物について概述する。また、調査期間中、あるいはそれ以前に檜山城跡で表採されている遺物についても合わせて分類して検討する。表採された遺物には灰釉陶器小片や、近世陶磁器が含まれるが、詳述は割愛する。

貿易陶磁器

調査では13点が出土した。中国産の染付が主なもので、漳州窯が3点含まれる。B 2群皿2点、E群皿3点が出土しており、通称「三の丸」に設定した第1調査区からの出土がほとんどである。E群皿には四方禪文が施されたものがみられる。第2調査区からは碗K群の染付1点が出土した。青磁は中国産のE群口縁部が1点、トレンチ2Aの土層から出土している。無紋で、表面はやや被熱している。また、茶器として使われたと考えられる朝鮮産の粉青沙器碗体部が1点出土した。このほか図化していないが、褐釉陶器1点が出土している。

表採された遺物には、中国産染付が3点含まれ、すべてE群皿の底部である。採集地点は通称「二の丸」周辺1点、現状アスファルト敷き登城道付近1点、もう1点は不明である。

時期は総体として、16世紀半ばから後半を中心とした時期に収まる。

国産陶器

中世に属すると考えられる遺物が8点出土した。それ以外にも17世紀初頭までに収まる可能性のある遺物が出土している。これらはすべて第1調査区からの出土である。瀬戸美濃大窯製品は、1～3段階の端反皿か丸皿、2～3段階の丸皿、3段階の天目茶碗の高台、4段階後半の折縁皿口縁部が出土している。また、唐津は口縁部などの17世紀初頭までの遺物が出土した。そのほか、土器が3点出土している。1点は土師器の小形甕口縁部であろう。1点は近世以降のかわらけの可能性はある。

表採された遺物には、瀬戸美濃大窯製品4点が含まれる。それぞれ1～2段階の端反皿または丸皿、2～3段階の丸皿、3段階後半の丸皿、4段階後半の志野中皿である。採集地点は檜山城跡内ということ以外は不明である。遺物の時期は年代の幅があり、可能性として15世紀末から17世紀初頭に収まる。最も新しい段階と仮定すると上限は16世紀半ばとなる。

金属製品・鉄滓

金属製品はすべて磁着する。細長く、断面が方形のものは釘の可能性はある。多くは排土や攪乱中からの出土であり、時期が特定できないうえに、錆が厚く付着しているものが多く、種別が判然としないものも含まれる。環状1点、円盤状1点がみられる。TP4からは鉄滓が1点出土した。やや磁着する。

小 結

通称「三の丸」は、近代以降は公園として使われたため、攪乱も多く、近代以降の銭貨や陶磁器も出土している。とはいえ攪乱はそれほど深く達していないため、中世の層は残存していると考えられる。中世の遺物は攪乱層中からも出土しており、層位の把握に必要な資料としては得られた遺物は少なかった。今回の調査とそれ以前に表採された遺物から、通称「三の丸」の使用年代は、概ね16世紀半ばから17世紀初頭であったと考えられる。当該期は、安東氏時代の後半を中心として、近世を含む。元和の城破りまでの期間が城の使用年代と考えられるが、明確に廃城期の多賀谷氏時代に続く様相かははっきりしない。

築城期に相当する遺物は今回は見られなかったが、須恵器系陶器の播鉢が出土するなど、築城されたと想定される15世紀末以前に使用された可能性が示唆される。

茶器の出土などからは、客をもてなす空間を含む日常的な空間を想定できる。遺物が出土する層の

下に、遺物を出土しない層があり、その下から遺構が検出されることから、複数の時期が想定されるが、時期の特定はできなかった。遺構上層から16世紀後半の遺物が出土している例があり、トレンチ2の複数の柱穴様ピットは、それ以前のそう遠くない時期に構築されたものと考えられる。

2. 全体の成果と課題

通称三の丸の平場で、複数の柱穴様ピット群と3基の土坑、極細い溝1条などがみつかった。時期は16世紀後半までの遺物が出土する層の下からの検出であり、遺物の年代から、そう離れていない時期の構築と考えられる。安東氏最末期ころの使用が想定される。短い期間に、建物があり、日常的空間として使用し、撤去して平場にした可能性もあるが、今後の調査において、時期決定の根拠となる遺構からの遺物の出土などを含めた、更なる事実の蓄積が必要である。

一方で遺物を含む層(Ⅲ層)とその下の層(Ⅳ層)の年代と構築が人為的であるかについて、今後も継続した観察が必要である。櫓台の脇をとおり平場に進入するルートには硬化面などの道の痕跡はみられず、主要なルートとしての日常的な使用ではなく、有事の際の曲輪間の移動などを目的とした通路と想定される。

三の丸の先端部でも同様に硬化面などは確認されなかった。地表面観察で曲輪となっている現状の地形よりもやや高い位置にみられた版築状の土層が人為的なものか、水成のラミナなのか判断できなかった。調査が進む中で新たな知見が得られるものと考えている。一方で櫓台の切岸と、複数の段状の曲輪となるであろう平場の痕跡があり、崩れていることから、そのあとで現在観察できる曲輪への造り替えがあったとみられる。遺物は表面に近いところから近世以降の碗1点が出土したのみであり、時期の特定は出来なかった。地山は砂層であるが、一部に粘土層との互層が確認できた。また、サブトレンチの先端は地すべりによって裂けた様相であると現段階では考えている。トレンチ1の平場縁側も同様かもしれないが、調査面積が狭いために判然としない。

第2調査区では、地表面観察で看取できる堀底道と土塁について調査を行い、造成の様子を確認した。堀底道は硬化面が複数確認でき、長い時間を通称本丸・二の丸へ続く、城の主要なルートとして使用されたことが明らかになった。遺物は排土からの1点であるが16世紀末の使用が想定できる。また、調査対象とした土塁の、西側の曲輪で16世紀末17世紀初頭から近世の遺物が出土していることから当該期の使用を想定することは妥当と考える。

築城期以前の遺物の出土については、その時期の使用主体が安東氏であるのか、あるいは当該期の使用のされ方は城であったのかなど、今後の検討課題である。

【参考文献】

- 愛知県 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- 男鹿市教育委員会 2004 『国指定史跡脇本城跡Ⅲ』
- 浪岡町 2004 『浪岡町史 第二巻』
- 能代市教育委員会 2004 『檜山城と檜山城跡』
- 萩原三雄・中井均編 2014 『中世城館の考古学』 高志書院
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院



第1調査区調査前(南東→)



第2調査区調査前(北西→)



トレンチ1 調査終了(南→)



トレンチ1、1A
AA' 土層(西→)



トレンチ1 AA' 土層
(南西→)

トレンチ1、1B
調査終了(東→)



トレンチ1 RP出土状況
(北東→)



トレンチ2 調査終了
(南東→)





トレンチ2、2B
調査終了(南→)



トレンチ2A北東側
調査終了(南西→)



トレンチ2A南西側
調査終了(南西→)

トレンチ2AA'土層
(西→)



トレンチ2A南西側土層
(北西→)

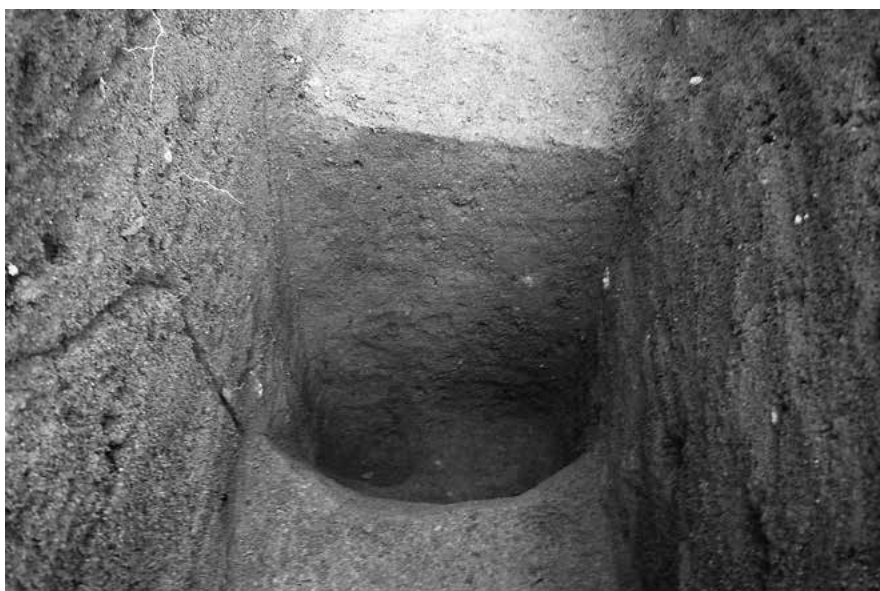


トレンチ2A中央土層
(北西→)





トレンチ2SKP検出・
SKP105半さい状況
(南西→)



トレンチ2
SKP106土層(北西→)



トレンチ2A
SK01半さい状況(北西→)

トレンチ3 調査終了
(北西→)



トレンチ3 土層
(南東→)



トレンチ3 SKP
108土層(南東→)





トレンチ4 A 調査終了
(南西→)



トレンチ4、4 A
サブトレを除き終了
(東→)



トレンチ4サブトレ北西側
調査終了(南→)

トレンチ4土層北西側
(南西→)



トレンチ4土層中央
(南西→)



トレンチ4土層北東寄り
(南西→)





トレンチ4切岸(西→)



トレンチ5調査終了(北→)



トレンチ5調査終了
南西側(北→)

トレンチ5 堀底道(北西→)



トレンチ5 中央土層
(北西→)



トレンチ5 土塁土層
(北西→)





TP 1 調査終了(北東→)



TP 2 調査終了(南東→)



TP 3 調査終了(南→)

TP4土層(南西→)

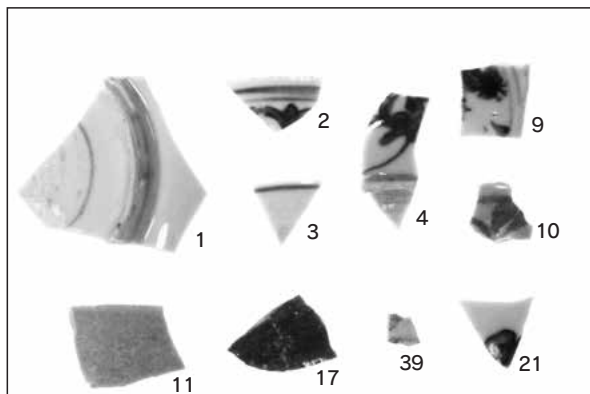


TP5調査終了(南→)

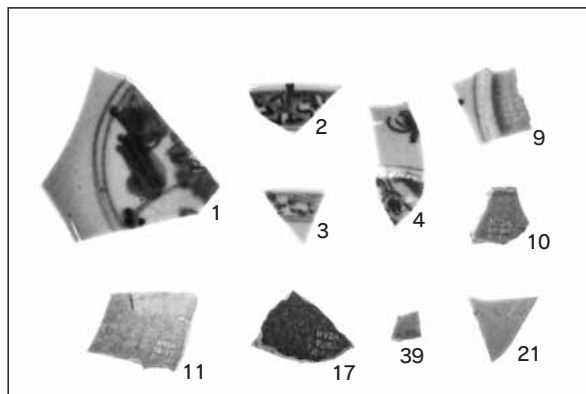


TP6調査終了(南西→)

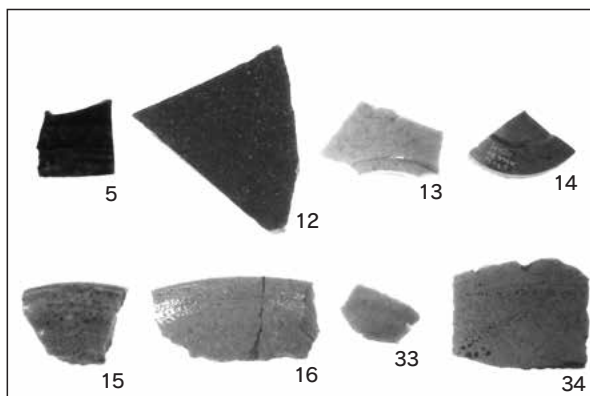




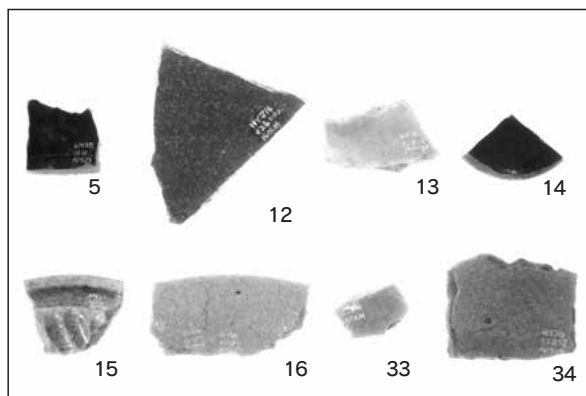
1. 出土遺物 貿易陶磁器(外側)



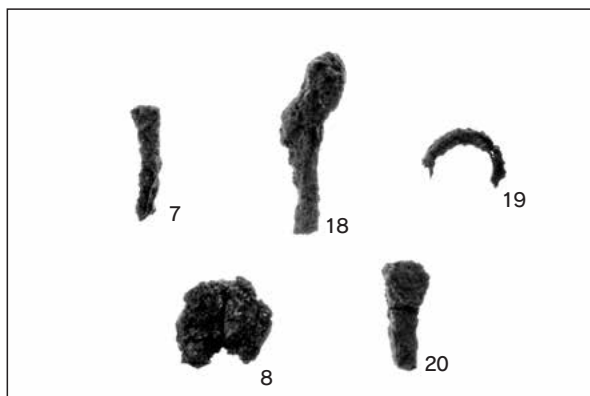
2. 出土遺物 貿易陶磁器(内側)



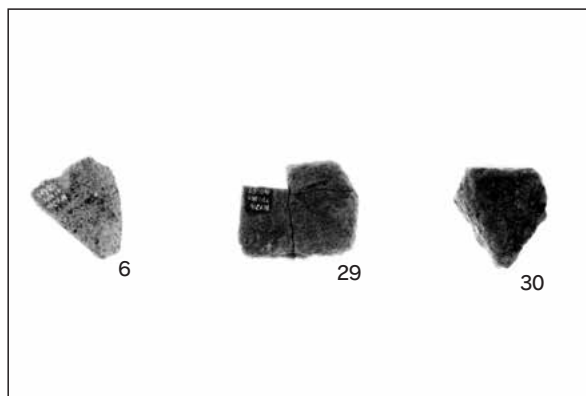
3. 出土遺物 国産陶磁器(外側)



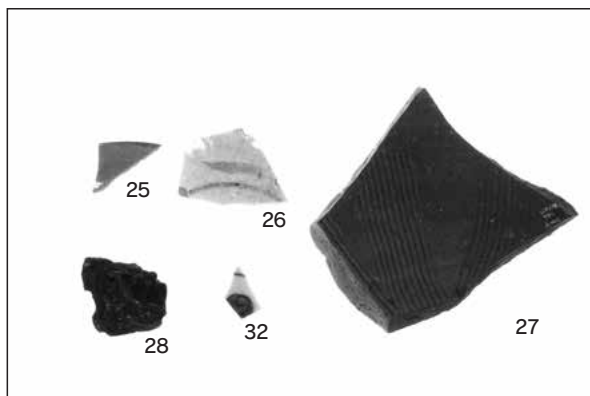
4. 出土遺物 国産陶磁器(内側)



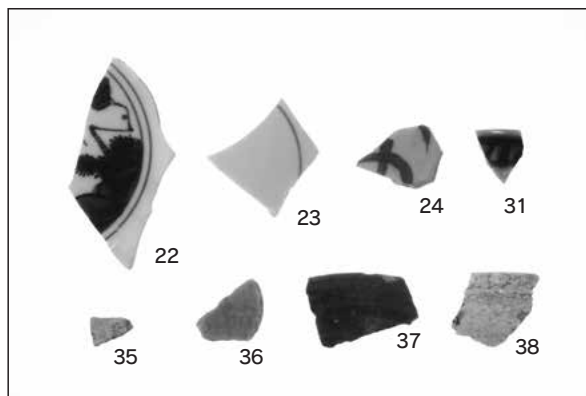
5. 出土遺物 鉄製品



6. 出土遺物 土器



7. TP出土遺物



8. 表採遺物

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきひやまあんどうしじょうかんあとひやまじょうあとといち							
書名	国指定史跡檜山安東氏城館跡 檜山城跡Ⅰ							
副書名	平成２８年度第１次発掘調査報告書							
編著者名	播摩芳紀							
編集機関	能代市教育委員会							
所在地	〒018-3192 秋田県能代市二ツ井町字上台１番１号 TEL 0185-73-5285							
発行年月日	西暦２０１７年３月３１日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひやまじょうあと 檜山城跡	あきたけんのしろし 秋田県能代市 ひやまあざふるしろ 檜山字古城、 おおまぎちない 大間木地内	05202	202-2 -109	40° 9′ 47′	140° 7′ 17″	20160606 ～ 20160920	134	檜山城跡 環境整備 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
檜山城跡	城館跡	中世 ～近世	堀切 土塁 切岸 堀底道 土坑 3基 溝状遺構 2条 柱穴様ピット		磁器 陶器 土器 鉄製品			

国指定史跡檜山安東氏城館跡

檜 山 城 跡 I

－平成28年度第1次発掘調査報告書－

印刷・発行

平成29年3月

編集・発行

能代市教育委員会

〒018-3192

秋田県能代市二ツ井町字上台1番1号

TEL 0185-73-5285

FAX 0185-73-6459

製本・印刷

株式会社大潟印刷